

く、愛に由つて爲さなくてはならぬ。故に助くるに由つて、其の人から何かの報を受けたいと思ふのは、大なる誤解である。報酬を本として、人を助けるは商賣的である。

第四節 助を受くる者の精神

人を助ける者が、愛に由つて助ける以上は、助けらるゝ者は、其の愛に對して對應しなくてはならぬ。助ける者と、助けらるゝ者との關係は、聖なる關係である。兩人とも、幸なる者でなくてはならぬ。「受くるよりも與ふるは福なり」とあるが如く、助ける者は、最も幸なる者である。助けらるゝ者は、愛を以て、充分の感謝をせなくてはならぬ。

第五節 親切と同情との關係

親切と同情とは、同意味に用ひられて居るのである。親切と云ふ言葉よりは、寧ろ今日の文學には、同情國語の「あはれをしる」と同じか」と云

ふ文字が多く用ひられて居る。「親切も同情も起る源は、一である、夫れは愛である、」基督曰く、「神は愛なり、」汝心を盡し精神を盡し意を盡し主なる汝の神を愛す可し、己の如く爾の隣を愛す可し」と、基督者の徳の内に、愛を高調し給ふたのである。此の愛が親切となり、又は同情となつて、此の世に實現さるゝのである。

第三十八章 謙遜

第一節 謙遜に就いての誤解

謙遜と云ふ事は、自分を他人よりも卑く思ひ、又は自分の事を卑下する事を云ふのであると思ふのは、大なる誤解である。又甚だしきに至つては、自分の力ある事をも、力ないと云ふのが、謙遜であると思ふのである。自分の子供の事を豚兒と呼び、又自分の妻を愚妻と呼ぶのを可

しとして居るのである。日本人が、西洋人に對して屢馬鹿をみる事がある、それは他の事ではない、學校の教師とならんとする時に、外人は其の人に向ひ、貴方は良く出来るかと聽く時は「出来ない」と答ふるのが謙遜であると思ひ、良くは出来ない」と答へると、外人はそれを眞にとり、「それでは御斷はり申す」と云はれた人のあるのを知つて居るが、實に滑稽に近い話であるが、其の人は、謙遜の意義を間違つた結果、斯くの如き失敗を招いたのである。

第二節 謙遜は徳ともなり又方法ともなる

謙遜は、正義とか眞理とかと云ふ一種の徳とは限らない、或る時は、謙遜は寧ろ生活の方法であると云ふても可い時がある、謙遜とは、己の力や己の好機會や、又は己の生命を用ゆる全き方法を云ふ事もあるのである。謙遜とは、己より弱き、己より卑き者の爲めに愛に由つて仕へる

のである。再言すれば、助を要する人の爲めに己の生命を喜んで捧げる事を云ふのである。謙遜の力は、己の爲めよりは、人の爲めに己を捧げる偉大なる力を云ふのである。

大なる智力を有する者、又は巨萬の富を有する人が、其の智と其の富とを社會の爲めに貢獻するを謙遜なりと云ふのである。人に自尊心がなくば、良き働は出来ぬ、人は自尊心と傲慢心とを同一の如く思ひ、自尊心を賤しめる事は、大なる誤解である。或る人から見れば、パウロもルイテルも傲慢心に富んで居る人であると思ふかも知れぬ。二人共自尊心の強い人であつたのである。鐵の如く強き意志の人であつた。志あれば、何事か成らざらんと信じて居た人である。併し二人共謙遜な人であつたと云ふ事は、誰も疑はないと思ふのである。

第三節 謙遜の二方面

以上に述べたる處に由り、他人よりも自分を卑く思ふ事は、決して謙遜ではない事も解り、又自尊心と謙遜とは、相反するものにあらざる事も解つたが、基督者が自分を價値のない者と考へなくてはならぬ時があるのである。それは他の時ではない、神の目前に出た時である。神に對して己は強い者であり、又價値ある者であると思ふ事は決して謙遜ではない。神の前に出た時は、勿論己の地位を能く知り、己は如何なる者であるか、又は己は如何にして救はれた者であるか、己は如何にして基督に由つて、新たに造られたものであるかを能く悟らなくてはならないのである。己が人に對すると、神に對する時には、大なる差別がなくてはならぬと能く知つて居らなくてはならぬのである。

故に基督者の立場から云へば、謙遜と云ふものは、一方には己の價値を認め、又一方には價値なき者と認めるのである。己の價値なき事を

思ふより、己は何事も爲す事は出来ぬと思ふのは、誤解の極である。前にも述べたるが如く、己の價値を知つて、全力を盡くして、他人の爲めに、活動しなくてはならぬのである。

第四節 基督は謙遜の模範

謙遜を學ぶには、基督を模範とするに勝る事はない、基督は神である故に、非常に貴き御方である事は、云ふ迄もない事である。其の神なる基督が、人の身をとりにて、此の世に來り給ふたと云ふ事は、基督の謙遜なる事を遺憾なく顯はして居る。其の基督が人となつて此の世に來り、天父の意に従はん爲めに、己を棄て、人に仕へ、遂に十字架に上つて、人の爲めに死に給ふたと云ふ事は、これ以上に謙遜の模範は他に求むる事は出来ぬ。

基督者が謙遜の生涯を送るのは、基督の如くならんが爲めであるの

である。基督の如くならんと云ふのは、他人の重き荷物を喜んで擔ひ、貧しき者の爲め、悲しめる者の爲めに喜を以て、其の人々の爲めに仕へる生涯が、即ち謙遜の生涯にして、これ實に基督の如くなる生涯である。

第三十九章 寛容

第一節 倫理界の新發見

人の罪を赦す可き基督の倫理的教訓は、新約書中非常に高調されて居るのである。人の罪を赦せと教へ給ひし基督の教訓は、倫理界に於ける大發明であつたのである。恐らくは此の教訓は希臘の倫理にも、又はイスラエルの倫理にも、斯くの如き高尚なる理想はないのである。何處の國の倫理でも、復讐を以て倫理として居るのである。別して日本では、昔時より仇打を以て武士道の花とも思ふて居たから、従つて

此の理想が全國民を支配して居つた事は、誰も否む者のない事實である。己の國民を愛し、敵を憎む可しとはイスラエル人の倫理である。「敵を愛せよ、人の罪を赦せ」との基督の教訓は、社交上に於ける一大革命的理想である事は、さもある可き事である。

第二節 人の罪を赦す可き基礎

人が他人に對して寛容の精神を以て其の人の罪を赦すと云ふのは、中々出來ない事である。齒を以て齒を償へと云ふ精神は、人の心の内から取り去る事は、中々に難義な事である。然るに基督者が、人の罪を赦す可き精神を有し、人の罪に對し寛大であると云ふ事には、大いに理由があるのである。

人間は皆罪人であつたのである。然るに、其の罪は誰に由つて、如何に赦されたかと云ふに、人間は基督が己の身を棄て、人間を神と和ら

がせ、人間の罪を赦し給ふたのである。罪の赦を受けた人間が、他人の罪を赦すは、當然な事である。自分々々から、神に和らぎ、基督に依つて罪の赦しを受けた以上、此の點に於て、他人に對する關係が一變するのは、當然の結果である。救と云ふものが先で、罪の赦しは、其の後に來たのである。救の眞實を理解する事の出來ない時は、罪の赦しと云ふ事は、解る理由がない、前にも述べたるが如く、希臘人又はイスラエル人には「罪の赦し」と云ふ理想のないのは、己が救はれた基督者の經驗がないからである。

第三節 人の罪を赦す可き度数

人の罪を赦す可き理由を理解した後に自然に起つて來る問題は、幾度迄、人の罪を赦す可きかと云ふ問題である。若し人の罪を赦すと云ふ事が、單に律法的であるなれば、此の問題は、容易に解決し得らるれど

も、基督者が、人の罪を赦すと云ふ事は、法律上の問題ではない、即ち愛の問題である。

基督に依つて救はれた愛に限がない以上は、人の罪を赦すにも、幾度と數を定める事は出來ない。基督が人の罪を赦すに、七度と云はじ、七度を七拾倍せよと宣ひしは、人の罪を赦すに、其の數に於て制限をたてるに、不可能なる事を教へ給ふたのである。人間が人の罪を赦すに艱難であるのに、其の赦す度数に制限がないとは、誰も驚かざるを得ないのは尤な事である。

第四節 人の罪を赦す可き條件

基督は、何でもかでも條件なしに、人の罪を赦せと宣ひし事は一度もない。いくら基督が寛大なる精神に富んで居るからと云ふて、人が如何なる惡事をして、よし／＼と云ふて、其の罪を赦す可き理由がない

のである。人の罪を赦す前には、果して其の人は、己に對して犯した罪に對して、十分に其の罪を悔ひて居るか何うか、其の人の罪の告白を十分に認めるに非ざれば、其の人の罪を赦す可き筈がないのである。併し告白さず其の方法に就いて、愛の精神に基づき、靜かに其の人の罪を咎めなくてはならぬ。其の人を罪人取扱して、其の人の罪を赦すのは、愛の精神に反するのである。若し社會上、人の罪を赦す高尚なる基督者の徳を養ふに非ざれば、此の社會には、喜もなければ又平和もないのである。大戦争の起る原因を探して見ると、復讐的精神が、與つて大いに力あるを發見するのである。

第四十章 忍耐

第一節 忍耐と愛と

忍耐は、基督者の徳の内、最も貴きものである。假令基督者が如何に謙遜であるとも、如何に柔和であるとも、亦如何に寛大であるとも、忍耐の徳を有して居らぬ時は、如何なる立派な徳でも其の効を奏し得ないのである。愛と忍耐とは、姉妹の如き關係を有して居る。「愛は凡そ事を忍ぶなり」とパウロが云ふて居るが、愛あつてこそ如何なる事にも忍ぶ事が出来るのである。忍耐は非常な訓練を受けて、其の徳を磨き上げる事が出来るのである。養ふ可きは、忍耐の徳である。

第二節 宇宙の法則に顯はれたる忍耐

神は決して焦り給ふ事もなく、又は近道をなし給ふ事もない、神が作り給ひたる宇宙の法則を見るに、皆忍耐の徳が顯はれて居るのである。春は決して不意には來ないのである、夏去り秋去り冬去りたる後に始めて來るのである。物が成長するのも、又其うである。種子から、不意

に急に實が生じないのである。必ず順序を踏まなくてはならぬ事は解りきつた事である。子供を教育する點に於ては、別けて忍耐の徳を養はなくては、子供を立派に教育する事は出来ぬ。氣の短い母には、子供は却つて厄介なものである。

子供を教育すると云ふ事は、母にとつては己の忍耐力を養成する大切な學校である。此の點に於ては、母が子供の教育者に非ずして、却つて子供が母の教育者である。

魚や鳥や獸の子を育てるには、餘り時間は要らぬが、人間の子供を教育するには、少なくとも二十年を要するのである。實に氣の長い事業である。一攫千金を望む乞食根性の者には、忍耐と云ふ徳の眞意を味ふ事は出来ぬ。小學を経ずして大學に入る事は出来ぬ事は、飽迄も知つて居りながら、己の成功を急ぐ爲めには、小學に入らずして大學に入

らんとする馬鹿な考を起すのである。之が失敗の源である。基督者たる者は、己の成功を焦つてはならぬ。近道は遠道であると云ふ事を忘れてはならぬ。人間は踏む可き階段を踏むに非ざれば、向上する事は不可能である。

第三節 ヨブの忍耐

舊約書にあるヨブの記を読む者は、ヨブは、如何に忍耐の徳を有して居たかと云ふ事は能く解る。尤もヨブ記は、實傳であるか、作り話であるかは議論のある事は知つて居るが、ヨブの記は、實話であるか、作り話であるか、忍耐其のものを學ぶには何の關係もないのである。

第一にヨブの失つたものは、財産であつた。第二は己の愛する子供であつた。第三は己の親友であつた。第四は己の妻であつた。財産も子供も朋友も妻も失つたヨブの身は、遂に大病の冒す處となつた。

併しヨブは如何なる困難をも意とする事なく、我裸にて母の胎を出たり、又裸にて彼處に歸らんと云つたのは當然であると云ふて、少しも眩く事なく、又は愚痴を云ふ事もなく、天父の御心の儘に任せて、堅き信仰を失はなかつたのである。ヨブに依つて、忍耐の徳の幾分なりとも學ぶ事の出来るのは、幸な事である。

第四節 忍耐の完全な模範

ヨブよりも誰よりも、我等に忍耐の徳を完全に目前に見せ給ふ御方は、基督である。基督の傳を讀む者は、一目瞭然、忍耐の偉大なる勢力ある事を悟る事が出来る。基督教が、全世界を支配する様になるのは、忍耐の徳である。基督は忍耐して、己の國を建設し、又其の國民は忍耐に依つて、其の王國を擴張したのである。基督教歴史は迫害の歴史であつた。敵はあらん限りの力を盡して基督教を撲滅せんとしたのである。其の策戦計畫に勝つ事が出来たのは忍耐である。

第七篇 國家に於ける基督者品性の實現

第四十一章 忠君愛國

第一節 基督教と國體と

今日世界の國々に敷かれて居る政治を大別すれば二つある。一は君主政治、二は民主政治である。歴史の變化に依つて、君主政治は、民主政治に近寄り、又民主政治は、君主政治に近づかんとする傾向があるのである。基督教は決して政治論に立入る可きものではない、基督の此の世に來り給ひし大使命は、靈の王國を建設するにあつて、肉の王國を建設しにおいてになつたのではない。従つて基督の目から見給ふ時は君主政體であらうが、又民主政體であらうが、其の政體には正邪是非

を定め給ふ事はなかつたのである。唯政體を支配する人々の心に、神の王國を建設し、其の人々の心を清め給ふたのである。故に基督教は、日本の國體に適用せられないとか、又は基督教は、君主政體には反對である、と主張するのは、基督教の何物たるかを知らざる人々の議論と見て差支ないのである。

第二節 忠君の基礎

前にも述べたるが如く、基督教は、政治論には彼此容喙せざれども、國其のものは、決して偶然の集合體とは認めない。又君主政治であれ、民主政治であれ、其の權威の源は人に非ずして神にあり、と信ずるものである。

基督者は、上にあつて國を支配する君主、又は大統領の下にあつて、臣民たる義務を盡すのは、神の御意に従つて盡すのである。故に君主は

幾多變るとも、神が變らせ給ふ事のない限りは、臣民として、君に忠義を盡す事に變る可き筈がないのである。基督者に對して汝等は不忠なりと稱へるは、實に見當違である。

基督者の忠君は、神に基礎を置く忠君である。其の基礎は堅固である。管に忠君々と稱へる者とは雲泥の差があるのである。基督者は、神を基礎にするに非ざれば、真正の忠君ではないと迄論するのである。

第三節 愛國心

愛國心は人性より湧出する國に對しての愛情である。子供が己の家を二となき好き處と思ふ如く、又愛國の情も同様である。如何に貧しき家であらうが、如何に汚ない家であらうが、子供が己の家を愛するは、家が立派であるとか、又は家に金があるとかと云ふのではない。母の愛が充ちて居る處に家の貴い處があるのである。其の如く日本は

富の點から云へば英國に及ばない、國の大なる處より云へば米國に及ばない、學問の點から云へば、獨逸に及ばない、併し愛國の情は國の富や、領地や又は學問に依るのではない。日本は我が 天皇陛下の在す處、又我が先祖の墳墓のある所である。愛國の情は何とも云へぬ一種のインスピレーションがあるのである。此の愛國の情も、基督者にとつては、神が基礎である。神より離れたなれば、愛國の情も消滅するのである。基督者は、口を以てのみならず、行爲を以て國を愛するのである。

第四節 愛國心の基礎

忠君愛國を以て、日本人專有物の如き思を懐くのは、大なる誤解である。何處の國を問はず、此の精神はあるのである。戰爭中、獨逸より歸朝した一日本人の談話に據れば、今日の戰爭に顯はれたる獨人の愛國心は、實に日本人に勝さつて居るとの事である。世界を敵として戦は

んとするには、確かに愛國の情が燃えるが如くなければ、此の大敵に向つては、敗北を來す事は云ふ迄もない事である。

而して世界に對して、獨逸の強國たるを示せるは、單にニイチエー主義の勢力ばかりではない、確かに獨逸は、愛國の精神が燃えて居るのである。獨逸の愛國心は、如何なる基礎の上に置かれて居るか知らないが、前にも述べたるが如く、若し其の愛國心が、深き根底がないなれば決して永續はしないのである。眞正の愛國心は、心に深き基礎を置き、行爲に於て、其の實を結ぶものでなくてはならぬ。

第四十二章 富者の富

第一節 富者に對する基督教の本領

國家に對する基督者の立場を明白にするには、何處迄も基督者は元

來の人心を支配する靈的王国に屬するものであると云ふ事を能く理解して居らないと、大いに誤る處があるのである。云ふ迄もなく、若し靈的天國を完全に此の世に實現する事が出来たなれば、此の世は即ちパラダイスとなるのである。基督教は主に個人に目をつけるのである。國家本位でなく、個人本位である。貧富に關しても、貧富其物に就いて彼此云ふのではない。貧者及び富者の心を、良くすると云ふのが、基督教の大主眼である。スベンサー氏の云はるゝ如く、鉛の本能から、金の行爲は出ては來ないのである。金の本能を作ると云ふのが基督教の本領である。

第二節 基督の清貧なる生涯

基督の生涯を能く吟味する時は、基督は貧富の問題に就ては、極めて淡泊であつた事は明白なる事實である。アガルの祈禱に「我に富も貧

も與ふる勿れ」と云ふて居るが、此の祈禱は決して基督の祈禱ではない、基督は決して富める者の一人になるとは思ひ給はなかつたのである。寧ろ貧者の地位に居る事を甘んじ給ふたのである。

クロー博士は、基督の生涯を三章に分けて居る。第一、基督は産聲を擧げ給ふた所は、馬槽である。第二、此の世にあつて、人の子は枕する處さへ有し給はなかつた。第三、基督は、死に給ふた時、借物の墓所に身を置き給ふたのである。以上の章を讀むと、基督は多くの人々の嫌がる貧に就いては、決して意とし給はなかつたのである。

第三節 基督が富者を貴びし例

併し基督の清貧なる生涯を見て、基督が富に對する考を間違へ、直ちに基督は富其のものに絶對的反對をし給ふたと思ふのは、誤の甚だしきものである。基督の弟子を見るに、其の内には富者もあり、又貧者も

あつたのである。自分の如く貧者にならざれば、我が下に來る事は出來ないと宣ふた事は、一言もなかつたのである。基督は何でも天父の下に來るに妨げとなるものがあれば、富を問はず、名を問はず、父を問はず、妻を問はず、凡てのものを捨て、我に従へと宣ふたのである。基督は富其のものに對して、決して呪の言葉を發し給ふた事は、一度もなかつたのである。

弟子達を見るにマリヤ又はマルタは家を有し、ザアカイは、富を有して居つた事は誰も否む者はない。基督はマリヤに向ひ、家を賣れ、又ザアカイに對して、富の全部を貧者に施せと宣ふた事はない、又基督は富者の家に招かれて、饗應を受け給ふた事を見ても、基督には、富者の富を卑める様な形跡は一も見えないのである。

第四節 富者に對する路加及び雅各の言葉

四福音書に、「地に財を蓄ふること勿れ」、「富者の神の國に入るよりは、駱駝の針の穴を通るは却て易し」、「貧き者は幸なる哉、天國は即ち其人有る可ければなり」との聖句を讀み、基督の眞意は、茲にあつたと早合點をするは、大なる間違である。四福音書中、馬太傳、馬可傳、約翰傳よりも路加傳に此の意が高調せられ、又は保羅の書翰よりは、雅各の書翰に、多く富者を呪ひあるは路加及び雅各の境遇及び其の人格に關して居る事を見通してはならぬ。保羅の書翰及び約翰傳を讀む時は、一言たりとも富者に對して呪ひたる事は、一度も見出す事は出來ない。

第五節 富者の貪慾と富の利用と

基督が呪ひ給ふ要點は、富其のものに非ず、富者の貪慾及び其の富の利用を誤る事に對して、大いに戒め給ふたのである。富者は、富が出來れば出來る程、貪慾になるのである。併し貪慾の罪は、決して富者ばかり

りてない貧者にもあるのである。基督は、富者貧者の別なく、貪慾其のものを呪ひ給ふたのである。

基督の目から見給ふ時は、富者の富は、決して利己の爲めにのみ用ふ可きてない、其の富は、神より依托された依托品であると云ふ事を主張し給ふたのである。富は人が奮闘努力して得たものである。其の努力の背面には、貴ぶ可き倫理の要素なる報酬、先見、小事に注意、信實、自制があるのである。

富者に對する基督の教訓は、富其のものを人の爲めに利用し、神の爲めに大なる榮光を顯はすと云ふ事を教へ給ふたのである。基督は假令清貧の生涯を送り給ふたとは云へ、富其のものを卑しめ給ふた事は一度もない、富者の清き富は飽迄も貴きものなる事を認め給ふたのである。

第四十三章 貧乏の原因

第一節 貧の標準

貧とは何ぞやと云ふ問題は、實に大問題である。貧に對して一定の標準を定めるは至難の事である。チャールズ・ブリス氏は、倫敦に於ける貧民窟の研究に拾七卷の書を著はして居る。其の書中、貧民を六つの階級に大別して居る。極貧と中貧と小貧と云ふ様に區別して居るのである。倫敦に於ける極貧と云ふものは、日本で見たくても見る事の出来ない貧乏なものである。故に貧と云ふ程度に就いて、一定の標準を設けないと種々なる面倒な問題が其れから起つて來るのである。併し今日一ツの困難なる事は、貧に對する定義が、十人十種の有様で、倫理學者の内的一致の出来ないのは實に残念な事である。

第二節 貧富の懸隔

今日社會の有様を見るに、富める者は尙々富が増加して、世界の金満家の財産は、非常な比例で増加しつゝあるのである。米國ではロッキンジャーとか、英國ではロスチャイルドとか、日本では三井とか岩崎とか云ふ金満家は、自然に富が涌いて來るが如くに、其の人々の財産が増加しつゝあるのは否み難い事實である。

其れと正反對に、貧者は反比例に増加しつゝあるのである。従つて貧富の懸隔が段々と遠くなり、富者と貧者とが、互に敵視する有様となつたのである。之が爲めに社會改革者や、又は社會主義者や、又は經濟學者や、種々なる方法を講じて、貧富の懸隔を近づけんとし、又甚だしさに至つては、今日の社會の組織を、根本的に破壊せんとするに至つたのである。

第三節 貧の三ツの原因

何故、今日社會に於て、貧者が多數を占めて居るのであるか、其の貧者の起る原因を研究するは、此の問題を解決するに大切なる事である。多くの學者の論點を集めて、貧者の起る原因を大別すれば、三ツとなるのである。第一、飲酒、第二、無益に物を費やす事、第三、仕事に怠ける事、他にも原因はあるには違ひないが、先づ此の三ツと見て差支ない。

第一、世界に於て飲酒の爲めに費す金高は、實に莫大なものである。何億圓と云ふ巨額の金を、此の飲酒の爲めに費すのである。其の飲酒の結果として起り來る入費も、是れ又莫大な額である。此等の莫大の金額は、主に貧者即ち勞働者の懐中より出るのである。世に貧者が多數を占めて居るのは、當然の結果であると云ふて差支ないのである。

第二、今日の貧者の多數は、手から口の間である。働いて得たもの

を直ぐ費してしまふ人間である。金を蓄へると云ふが如き感念は少しもないのである。得た金は芝居を見に行くとか、寄席に行くとか、賭博をやるとかして、皆得た金を無くしてしまふが今日の貧者の状態である。

第三、社会事業に従事する者は、能く知るが如く、貧者のあるは、怠者の多いに原因するのである。辛い仕事が好きである。牡丹餅が棚から落ちて来れば可いと思ふ人間に、貧者が多いのである。彼等の爲めには、慈善事業は、益を興へるよりは却つて害を醸すのである。

第四節 不幸なる貧者

以上述べた三つの原因は、己が自らを故意に貧乏に陥し入れた落穴であるが、不幸にして止むを得ず、貧者になる人がある。第一、生活の重荷を擔ふに、身體も又精神も不具にして堪へ難い人である。併し盲人

は驚く程収入が多い、跛は、比較的精神の活動のある人である。聾は殆んど貧者の内にないと云ふて可い程少数である、故に不具にして貧者となるのは、少数である。

第二、不意の災難即ち病氣とか、老人になつたとか、事業の失敗とかから起つて来る貧者も比較的小數である。

第三、文明の進歩する結果、舊式の機械が廢るが如く、或る職業は或る進歩せる職業の爲めに、其の働を失ひ、貧に陥る事がある。併し此の種の人も極く少數である。故に貧の主なる原因は前に述べたる飲酒、徒消、怠慢の三者である。

第五節 貧者に對する基督教

前章にも度々述べたるが如く、基督教の本領は、人の心の生命を清くし又健全にするのである。心の生命が清くなれば従つて善良な人と

なる事が出来る。いくら貧者に同情を表しても、其の原因なる心の生命を改革しなくては行爲を良くする事は不可能である。又不幸にして貧困に陥つても心の生命さへ清くあれば幸福なる生涯を送る事が出来る。此の點に於ては、富者よりは貧者に幸福な人が多いのである。

第四十四章 資本家の義務

第一節 資本に對する基督の意見

基督の時代と今日の時代とは、其の趣を異にして居る事は云ふ迄もない事である。第一世紀と第二十世紀とは、物質的文明の度に於ては雲泥の差がある。併し資本家の問題に就いては、今日よりは寧ろ基督の時代の方が激烈であつたかも知れぬ。基督の時代に於ける社會の狀態は、非常に危険であつたのである。勞働者の手は、今日よりも働か

す餘地がなかつたかも知れぬ。故に若し基督が此の方面に心を止め給ふ時は、世人の注意を惹く可き多くの活問題があつたのである。

併し基督は一度たりとも、資本家の問題には立入り給はなかつた。又基督は資本家を破壊するが如き言葉は、一度たりとも發し給はなかつたのである。寧ろ斯くの如き問題に立入る事を避け給ふた様な傾向があるのである。強いて基督の資本家に對する意見は、如何にと尋ぬる時は、基督の遺し給ふた比喻の教訓にては、資本を共有にす可き理想は少しもない、或る者には五斤、或る者には三斤、或る者には一斤の資本を與へ給ひし處を見れば、寧ろ基督は資本家に對して、同情を表し給ふたと思はれるのである。

第二節 經濟上より見たる資本

前章に於て論じたるが如く、富と云ふものは、倫理上大必要なるもの

である。世に貧なるものがあるは、或る人が富を有して居ると云ふ事が、其の原因にはならないのである。其れには、他に原因があるのである。倫理學上から云へば、國に富が増加して其の富を有益に用ゆる時は、貧者は其の影響を受けて、却つて其の貧を軽くする事が出来るのである。其れと同じ理由にて、富者の金庫に遊んで居る富を集め、資本家の手に渡す時は、機敏な資本家は、其の金を以て遊んで居る多くの人の手を働かす事が出来るのである。故に資本家と云ふものは、社會の罪人ではない、却つて社會の恩人である。労働者が資本家に依つて害を受けるどころではない、益を受けるのである。

第三節 資本家の心

今日社會に於て、資本家に對する反對の聲の高くなつて來たのは、種々なる理由があるのである。宗教上及び倫理上から、資本家の資本其

のものに對して、彼此云ふ可き權利がないのである。資本其の物の問題は、宗教上及び倫理上の問題ではない、確かに經濟學上の問題である。併し資本家其の人の問題となる時は、宗教上、倫理上の問題となるのである。前にも論じたるが如く、基督は靈的王國を建設する爲めに、此の世に來り給ふたのである。故に基督教の本領は、資本家の資本其の物に非ずして、資本家の心にあるのである。資本家の心を良くすると云ふのが、基督教のある所以である。

第四節 資本家と労働者の和合

今日の資本家に要す可き第一は、資本家が労働者に對して、忠實に親切にしてやる可き一事である。資本家が他人を見る事なく、利己主義一點張に、唯己の懷中さへ肥やせばそれで可いと思ふ時は、資本家と労働者との間に軋轢の起るのは自然の理である。資本家が忠實に誠の

心を以て其の資本を用ゆる時は、誰一人反對する者がないのである。

今日熱心な基督信者の經營して居る大會社には、一度なりとも、資本家と労働者との間に軋轢を見た事がないのでも、確かに證明する事が出来るのである。ストライキの起る會社には、必ず此の點に缺けて居る處があるのである。資本家が給金に於て又は時間に於て、労働者の家庭を豊かにする時は、労働者は悦んで資本家の下に働くのである。

第二は資本家が或必要の場合には、己を労働者の爲めに犠牲に供すると云ふ事である。資本家は稍もすると、労働者に對して、不利益に働きの時間を縮めたり、又は製造品の賣口の少ない時は、休業したりする爲に、多くの子供を有して居る労働者は、忽ちに其の糊口に窮するのである。又労働者には、不意の禍が身に來る事があるのである。假へば子を失ふたとか、妻に死別れたとか、或は又病氣に罹る様な事があるので

ある。斯くの如き場合に、労働者を助け、其の家庭に煩の無い様にしてやりさへすれば、決して労働者は恩を仇に返すと云ふ様な事は、斷じてないと云ふても差支ないのである。社會の一波亂を起す可き大問題も宗教上より解決をつける事の出来るのは、此の理由に依るのである。基督は資本の問題に立入らずして、資本家の心を本領として活動し給ふた事は實に基督の基督たる處があるのである。

第四十五章 労働者の要求

第一節 資本家と労働者との關係

資本家と労働者とは、相共に手を携へて往く可き筈のものなるに、今日の狀態は、夫れに正反對で、資本家と労働者とは、敵味方の感あるは、誠に歎ず可き事である。資本家はいくら資本萬能を主張しても、労働者

がなくば、其の巨萬の資本は、運轉して利益を得る事は出来ないのである。夫れと同様で労働者がいくら働かんとしても、資本家がなくば食を得る事は出来ないのである。故に資本家と労働者とは兄弟の如き思を以て、互に國の爲め裨益を計る可きである。茲に於て國は榮え、且つ富を増す事が出来るのである。

第二節 兩者を調和さする種々なる方法

資本家と労働者の間の調和を計らん爲めに、種々なる方法が講ぜられたのである。大別あれば二つあるのである。第一、利益分配法、第二、資本家と労働者との共同事業である。此の二つの主義に由り、種々なる計畫が立てられたのであるが、其の計畫の多くは、水の泡となつてしまつたのである。資本家と労働者との關係は、單に肉につける問題ではない、資本家も人なれば労働者も人である。詰り人と人との關係に

なつて來るのである。

第三節 労働者の二つの要求

今日労働者の要求する大問題は、何處の國に於ても二つあるのである。第一、給金、第二、時間の問題である。第一の給金問題とは云ふ迄もなく、労働者は今日の給金を以て満足する事は、出来ないのである。労働者は單に手から口では満足しないのである。働いたる給金を以て恥かしからぬ生活がしたいのである。資本家ばかり榮譽榮華に生活し、出づるに自働車あり、住むに大理石の家を以てするに係はらず、労働者は住むに家なく、妻子も碌に養ふ事の出来ない有様では、満足する事の出来ないのもさもある可き事である。そこで労働者の要求は、給金の標準は、其の労働者の技倆に依り、其の家族を支へるに適當なる給金を與へよと云ふのである。若し資本家が熱心なる基督者であるなら、

恐らくは此の要求に應ずるのは、適當な事である。

ウエスレー氏は、人は氷の如く冷めたい足をして居ては、己の罪を改める事は出来ない」と言はれたが、生活に少しも餘裕のない者は、基督者になる事は出来ないのである。朝から晩迄、食する事のみ心を取られて居る人は、宗教心が起つて來ても其の宗教心を養成する時間がないのである。若し資本家にして、労働者に對して、充分の給金を拂ひ得ざる會社は、政府は宜しく其の會社を解散させ、労働者に對して充分の保護を與ふ可きである。

第二のは時間の問題であるが、今日の労働者の労働時間は、八時間乃至十時間である。日本の如き國では、時間に多小緩みがあるが、外國では八時間と云へば、其の八時間は、正味の労働時間である。そこで、今日の労働者の要求は、其の労働の時間を短縮せよと云ふのである。甚だしきは、或る労働組合は、四五時間を以て労働の時間とせよと云ふのである。此の點に就いては、労働者と資本家との間の争闘は、止まないのである。

第四節 労働者の責任

前にも述べたるが如く、資本家と労働者との關係は、人と人との關係なれば、詰り宗教上及び倫理上の問題となるのである。資本家も労働者も共に基督者であつたら、斯くの如き問題は、一朝にして解決せらるるのである。資本家の事は、既に論じたから、今改めて茲に論ずるの必要がないが、労働者は眞實にその労働に従事し、労働者たるの地位は、神の與へ給ふた地位なりと信じ、其の境遇に甘ずる様になれば、今日の労働者の不幸の百中の九十迄は取り去られるのである。資本家と労働者との争闘は、其の罪は單に資本家にあるのではない、労働者自らも大

いに省みなくてはならぬ處があるのである。

第四十六章 戦争に對する國民の義務

第一節 戦争哲學

何故に國と國と相戦ふ事があるかと云ふ問題に對して、哲學的に答ふる事は甚だ困難な事である。世界の平和論者は、全力を盡すにも拘はず、二十世紀の今日と雖も、戦争は止む處ではない、尙々火の手は強く、各國各々平和の名義の下に、軍備擴張に汲々として居るのである。詰り今日の平和と云ふものは、弱者は強者に勝つ事は出來ないと云ふ壓制的平和にして、仕方がない程度の平和である。背面に兵士を置いて居る平和は、眞正の平和ではない。個人に亂暴を爲向くる者があれば、其の者に對して防禦する權利を有して居るの

である。又個人の財産に手をつける者があれば、其の者を捕へ、法廷に訴へる權利があるのである。若し個人に此の權利ありとすれば、國が國に亂暴を働き、其の國の範圍を冒さんとする時は、國は其の國に對して戦ふ可き權利を有して居る事は云ふ迄もない事である。故に哲學的に云へば、國が戦ふ可き權利のあるは二ツの場合である。一は防禦的である。二は擴張的である。併し或る場合には、防禦は擴張となり又擴張は防禦となるのである。此の二ツが戦争哲學の原理と云ふて可いかも知れぬ。

第二節 國際的倫理

國は個人の集合體である事は、誰も知つて居る事であるが、個人の權利を害する者があれば、直ぐ法廷に訴へ、其の正非を正す事が出來るが、國が國の權利を冒す時は、法廷に訴へて正邪を正す事は出來ないので

ある。今日の處は、兵力に訴へて其の解決の道をつけるより他に法がないのである。

今日國際會議はあるが、其の國際會議と云ふものは、實は薄弱なものである。近き一例を挙げれば、ベルギーの中立は、國際會議に於て、各國の大使が互に調印して其の中立を誓つたてはないか、然るに獨逸が其の誓約を破るや、國際會議に於て調印したる國々は、獨逸の國際的法律違犯として、之に向ふて戦争をした國は、先づ英國位であつて、他の國々の政府は、知らぬ顔をして居るのである。これでは、國際倫理は、何の價値もないのである。國際法を破つた獨逸は、悪い事にはさまつて居るが、其の非法に對し何も云はぬ國は、其の責任を脱るゝ事は出来ないのである。

ローズベルト氏が、頻りに國際法の頼み難きを盾にして、軍備擴張に

熱中するは、一面の理由を有して居るのである。戦争が始れば、中立を破るは非とか正とかと云ふのは馬鹿げた様に思はれるのである。其の位、國際法に重を置くなれば、其れに對して充分の覺悟がなくてはならぬ。今日國際倫理が、充分の勢力を有して居らぬ事は、實に遺憾千萬である。

第三節 戦争に對する基督者の立場

日本に於ける基督者が、戦争に對する態度に就きては、大いに世人の注意を引いて居るのである。基督者の内には、無抵抗主義を主張する論者はないが、併し其れは極めて小數である。基督教は、飽迄も唯一の天父を戴く、四海兄弟主義を主張するのである。平和論者の基礎も實に茲にあるのである。眞正の平和を欲せざる者は、基督者の内には一人も居ない。戦争の憎む可きものなる事は、何人も皆知つて

居る、出來得る限り、戦争を避けんとして居るのである。

併し國は個人とは違ふ、個人の倫理とは、大いに違ふ處があるのである。個人としては、戦争なるものに反対して、國としてたゞなくてはならぬ場合があるのである。基督者が戦争に對して、個人の倫理と國の倫理とを混同する處から、大なる間違に陥る事があるのである。

個人なら、人から敵かれても黙つて居ればそれで済む事もあるが、國としてはさうはゆかぬ。基督者は、決して國民として孤立の出來るものではない、他國より受ける恥辱に對しては、其れに對する義務と權利とを有して居るのである。日本人である以上は、日本國を代表す可き個人である。國を防禦する點に於て、又は國の發展を計る爲めには、戦争を正義と認め、國の爲めに戦はなくてはならぬ事があるのである。國と云ふ時は、其の内に云ふに言はれぬ一の權能があるのである。或

る場合には國の爲めに個人がなくなると云ふても可い時があるのである。基督者が國民であると云ふ自覺がある以上は、國の良心に従ひ、戦争に出て、國民の使命を全ふする大義務と大權能とを有して居るのである。

第四十七章 婦人の地位

第一節 婦人の種々なる要求

著者は數年前、英國ロンドン市にあつて婦人の政治的運動なるものを目撃して、婦人の非常なる活動を見て、驚いたる一人である。巷に大聲を擧げて、演説をして居る婦人があるかと思ふと、數千人の婦人は、隊伍を組んで公園に示威運動をする者があり、丸でお祭騒ぎをして居たのである。日本に於ても、新婦人の名を以て近頃婦人にある可からざ

る運動を試んとして居る者があるのである。婦人は、社會に對して種々なる要求をして居る。其の要求は一ではない、婦人が、各、勝手な要求をして居るのである。或る婦人は、家庭的な要求、或る婦人は、經濟的要求、又或る婦人は、政治的要求をして居るのである。今日婦人の要求は、十人十色の有様である。

第二節 婦人の本領

男女に貴賤の別のない事は、基督教の主張する處である。併し男女は身體も心も大なる差異がある事は、何人も否む能はざる事實である。従つて男の本領と女の本領とは、自づから違ふのである。

理想的婦人は、基督の母なるマリヤに於て見る事が出来る。マリヤは、家庭の中心點にして、家庭に玉座を占めて居られたのである。基督は家庭に重を置き給ふたのである。基督は三十年と云ふ永い年月を

ナザレの家庭に生活し給ふたのである。基督は家庭を育兒處、學校、宗教的生涯を送る可き聖なる處なりと主張せられたのである。此の聖なる家庭に樞要なる地位を占める者は、母即ち婦人である。此の家庭に神聖なる愛が湧き出づるのである。婦人の地位程、貴きものはないのである。自ら政界に出て奔走するよりは、寧ろ家庭に於て、大政治家となる可き大人物を養成するが遙かに貴き地位を占めて居るのではないか、此の貴き地位を抛ち己の本領を省みず、政治界の權力を握らんとして騒ぎたてるのは、婦人としてある可からざる事ではないか。

第三節 婦人と子供

或る婦人は、子供を養育する事や臺處にて働く事やを五月蠅く思ひ、一生獨身にて暮さんとする者があるが、これ婦人として己の本領を害せるものである。又假令結婚をしても家事を掌る事を省みず、子供を

乳母に托して家に居るよりは外にあるを樂とする母があるのは實に悲む可き事である。

子供を教育すると云ふ事は、母の特權である。其の大責任は、母たる者の双肩にあるのである。如何なる良い乳母であつても、母親の代りになる事は出来ないのである。子供の唯一の倫理的感化は、家庭にあるのである。學校であらうが何であらうが、子供を教育するに家庭に勝る處はない、ギルマンと云ふ婦人の文學者は、政府は、育兒院なるものを造り、子供を預り、母に代つて教育する時は、母は其れが爲に多くの時が與へられ、子供を育つるよりは、他に働を爲す事が出來ると頻りに主張して居られるが、如何に偉い婦人でも、自分の子供を教育する事も出來ず、又己の子供を他に托してまで、他の事に従事せんとするは、實に愚に近いのである。

歴史家レキ氏は、羅馬國の亡びたる一の原因は、富める婦人が、己の子供を乳母に托して居つた事に依ると云ふて居る。ルソウは、己の五人の子供を、育兒院に入れて、母が己の子供に對する責任を脱れしめた事は、己の子供を棄てたと同様である。日本國の亡ぶる場合がありとすれば、確かに家庭の腐敗に由るのである。

婦人たる者は、子供を離れて、他に大なる要求がある可き筈がないのである。此の世の清くなるのは、婦人の力が大いに與つて效あるものである。吾人が婦人に要求する處は他ではない、己の本領たる家庭に、玉座を占め、子供に聖き感化を與へ、偉大なる人物を養成して、世界を動すのが、婦人の婦人たる大なる役目である。經濟的又政治的婦人の要求は、婦人自分を卑しくせしめるものである。

第四十八章 兒童問題

第一節 兒童の舞臺

兒童問題は、二十世紀の大問題である。ヘレン、ケラ女は、二十世紀は、兒童の世界なり」と題する書を公にせられたが、確かに二十世紀は兒童の舞臺である。教育界に於ける十九世紀の大發明は、兒童であつた。學者が兒童に着眼し、兒童を學理的に研究し始めたは、國家に於ける革命的の大研究であつたのである。今日迄教育界には、兒童は大人の小形なりと思はれ、大人本位に兒童を教育して居つたのである。基督敎界に於ても、兒童を小なる大人の如く思ひ、大人の宗教を兒童に強めて居たのである。此の點に於ては、此の時代ほど、兒童に壓迫を加へたものはないのである。

第二節 流より源泉に注意せよ

ホルン博士の云はるゝ如く、此の世の人は、山の頂に充分の設備をせずして、山の下に墜ち來る怪我人に對して、それ矯風會とかそれ禁酒會とかと云ふて、其等の人々の爲めに汲々として居るのである。山の上を見れば、何も設備もないから、怪我人の出來るのは當然の事である。其の怪我人の起る可き源に、心を用ひず、唯傷を負ひたる人々を救ふ事にのみ心を用ゆるは、實に愚な事であるのである。

源泉を改革する事なく、唯流を清くせんとする事は、勞して效のない事である。論より證據、此世は悪くなるとも、良くなるはならないのである。石川五右衛門が「濱のまさごは盡るとも世に盜賊の種はつきまじ」と云ふたが、世の人が流にのみ注意して、盜賊の起る源泉を遮るにあらざれば、盜賊の盡きる筈はないのである。基督敎界も、實に愚な事をして居

るのである。大人を救ふは、世を救ふ事と思ふて居るのである。大擧傳道とか協同傳道とか云ふて、金も力も、此の方面にのみ傾けて居るのである。何百人の受洗者があつたとか、又は何千人の求道者があつたとか云ふて、其れて神の國が此の世に建設せらるゝと思ふて居るのである。百年大擧して、此の世を盡く救ふても、百年後には、何百倍の兒童は、大人の繼續者となつて居ると云ふ事を忘れるのは、實に愚に近いのである。

第三節 國家と教會との基礎

兒童を教育するは、國民教育の基礎である。兒童を宗教的に教育するは、教會の基礎である。兒童よりして、酒なるものに手をつけさす事がなくば、大人になつて酒を飲む可き筈がない、兒童の内に、基督に其の基礎を置いて置けば、罪に陥る筈はない、兒童は恰も蠟の如く丸くもす

る事が出来又は四角にもする事が出来るのである。善人にするにも、惡人にするにも兒童の時である。兒童の時に一度でも頭に這入つたものは、容易に除かれないのである。又一度頭に這入つたものは、何時か其の理想は、實物となつて、此の世に顯はれ出るのである。

兒童から、鍛へ上げなくては、偉い人物を造り出す事は出来ないのである。兒童程感化を受け易い者はない、見るもの聞くもの皆寫眞を取るが如く、兒童に寫るのである。學問でも宗教でも、大人になればなる程、教育さるゝ事が六ヶ敷なるのである。何の達人になるにも、兒童の時から始めなくては駄目である。此の解りきつた道理を認めず、大人にのみ心を留め、大人本位でやり通さうとする事は、國家及び教會の基礎を危くするのである。

第四節 基督と兒童と

日本は「兒童國」と云ふ名稱をつけられて居るが、果して其の名稱の如く、兒童本位の國であるか大いに疑問である。兒童を愛すると云ふ點に於ては、日本は他國に譲る事はないと思ふ、併し兒童其の者の性質を能く知つて兒童を尊敬し、兒童の權利を重んじ、兒童教育の爲めに學校であれ、教會であれ、公園であれ、裁判所であれ、何から何迄、兒童を本位にして設備に設備を盡して居るとは云へないのである。此の點に於ては残念ながら、外國に後を取つて居るのである。兒童に對しては、基督の如く兒童を國の中心に置かなくてはならぬ、又基督の如く神の子たる兒童の權利を重んぜなくてはならぬ。黄金の世界が此の世に來るは、凡ての事が兒童中心となつて始めて來るのである。

第八篇 基督者品性の教會に於ける實現

第四十九章 禮拜、主の日、聖書、祈禱

第一節 禮拜

或る一派の基督者は、基督教は内部的にして外部的ではない、従つて心に於て神を信じてさへ居れば、外部に形をなして、其れを現はす可き必要はないと主張するのである。云ふ迄もなく、宗教は内部的であるが外部に現はす事は、決して悪い事ではない。基督は、心の宗教の御方であつたが、基督の時代には、宗教的禮式は、基督の周圍を包圍して居つたのである。基督の時代には、二つの大なる宗教的中心があつたので

ある。それは一は神の宮、一は會堂であつたのである。

宮は古代より始はザイヨン山次はエルサレムの神殿に中心を有し、其の禮拜の儀式は、犠牲であつたのである。會堂は比較的近世の發達にして、村々到處、其の建物を有して居たのである。宮の頭は、祭司の長にして、サドカイ黨に屬し、會堂の頭は、學者にして、主にパリサイ黨に屬して居たのである。基督は、宮の禮拜も、亦は會堂の禮拜も、一度たりとも賤しめ給ふた事はない。基督は自ら宮に參り、安息日毎に會堂に集るを名譽としておいてになつたのである。基督者が禮拜堂に參り神を禮拜する事は、基督者の義務であるからでなく、非常な貴き特權であるからである。

第二節 主の日

主の日を守る可き理由に就いては、或る者は、十誡に重を置き、或る者

は、基督の甦り給ふた日に重を置き、又或る者は六日目即ち土曜日を安息日と呼び、或る者は七日目即ち日曜日を主の日と呼びて其の日を守つて居るのである。其の理由は、如何にあるとも、一週に一日休むと云ふ事の必要は、人間の生れたる性質上、非常に必要であるのである。

此の荒き世渡りをする者が、靜なる時の必要なる事は、云ふ迄もない事である。日々商賣の爲め、又勞役の爲めに苦しめられて居る者が、一週に一日其の職業と勞働とを休み、己の精神修養の爲め、靜なる時の與へらるゝと云ふ事は、實に幸なる事である。日曜日を單に遊びの日の如くに思ひ、其の貴き日を浪費するは、實にすまぬ事である。基督者たる者は、基督が安息日を重んじ給ふたるが如く、主の日を重んず可き筈である。基督者が主の日を主の日と思はず其の日を汚す時は、忽ちに其の影響は、基督者の神に對する、信仰を弱くするのである。

第三節 聖書

基督が舊約聖書に、神の最も高き威嚴ある事を認め給ひし事は、誰一人疑ふ者はないのである。基督は舊約書に由り、神の御心のある處を知り、舊約書を學ぶ事に、子供の時から、熱心であらせられた事は疑はれない事實である。舊約書は、學者の手に依つて、能く章句に分たれ、會堂に於て一年中規則立つて讀む事の出來る様になつたのである。

基督は、子供の時は、常に會堂に出席してゐてになつたから、聖書には非常に精しくあらせられたのである。基督者は、基督の如く聖書を貴び、聖書に依つて、己の心を養ひ、日々の食物の如く、聖書を食としなくてはならぬ。基督者は、子供の時代から、天國に入る迄、生徒の資格を有し、謙遜して日々聖書を讀み、神の御心のある處を悟らなくてはならぬ。

第四節 祈禱

基督が、安息日毎に、會堂に集り給ひし時に、何よりも最も喜び給ひしは、祈禱であつたのである。宗教の歴史に就いて、最も著しき事は、犠牲を以て神を禮拜せし事より變じて、祈禱を以て神を禮拜する様になつた一事である。基督は祈禱の御方であつたのである。或る時は、森林に入り、或る時は、山に登り、或る時は、園に隠れ、神と交はるを以て、最上の悅樂としてゐてになつたのである。基督は祈禱の習慣があらせられたのである。習慣と云へば、語弊がある様であるが、基督には、祈禱は習慣となつて居つたのである。基督者にとつては、祈禱は生命である。祈禱をせざる基督者は、天死したと同然である。基督者と神との交通は、祈禱に由るのである。

第五十章 聖徒の交際

第一節 基督教會の宗派

基督教會は、舊新の二大宗派に分れて居る。舊派は希臘教と羅馬教との二派に分れ、又新派の内には、宗派の数は、百派以上もあるとの事である。併し其の宗派を政體上から、大別すれば、三ツとなるのである。第一は監督派、第二は長老派、第三は民衆派である。又教理上から大別すれば二ツとなる。第一はカルヴァキン主義、第二はアルメニン主義である。併しカルヴァキン主義とアルメニン主義とは、互に一步宛寄り合つた結果、非常に接近して居るのである。故に温派カルヴァキン派とか、温派アルメニン派とか云ふ名稱が出る様になつたのである。今日我が國に於ける基督教會も、皆其流を外國に汲んで居るのである(獨立と云

ふも形式計りて思想と生命とに迄は及ばない)。日本基督教會は、長老教會の別名である。組合教會とは、コングレッチナリストと同じく、日本聖公會はエビスコバルと同族である。日本メソジストも、バプテスト教會も、其の名稱は、皆外國の名稱を其の儘に用ひたのである。外國に於ても、又は日本に於ても、各宗派合同の議論は盛んであるが、何時も立消になるのは、残念な次第である。宗派分立の基礎は、鞏固にして容易に合同し難い様である。

第二節 各宗派の長處と短處と

基督教會に宗派なるものゝあるは、皆其の歴史を有して居るのである。宗派は、偶然に出來たものではない、宗派のあるは、皆主義の爲めに奮闘した結果、遂に分立する様になつたのである。各宗派に夫々長處がある如く又短處もあるのである。長老教會の如きは、カルヴァキン主

義を重んずるだけあつて、其の信仰も非常に嚴格である。神の愛に依るよりも、寧ろ神の聖なる性質を高調するの傾向があるのである。メソジスト教會は、アルメニン主義を重んずる傾向があつて、非常に愛に重を置くのである。又神を禮拜する方法に就いても、各派各其の趣を異にして居るのである。聖公會の如きは、教會の建築法と云ひ、又教師の服裝と云ひ、他の宗派と大いに異なる點があるのである。又教師の説教振も、又は其の説教の題目の選び方も、宗派宗派に一定の傾向があるのは否み難い事實である。

第三節 心理的宗教の基礎

近世の心理學者は、宗教心の基礎を心理に置く様になつたのである。人間の氣質や、其の人の心理状態やが、宗派なるものを形作るものと主張する様になつて來たのである。各宗派に屬する人々の心理

状態と氣質とを調べて見ると、成程と思はるゝ處があるのである。メソジストや、救世軍や、東洋宣教會やに屬する人々の多くは、感情的である。

ユニテリアン及び組合派の一部の人々は、主に智的の人々である。日本基督教會及び或る派の人々は、主に意志的の人々である。勿論云ふ迄もなく、日本基督教會に情の人がない、メソジスト教會に智の人がない、組合教會に意志の人がないと云ふのではない。主に以上述べた性格の人々が己が性に從つて集つて居ると云ふのである。情を重んじて居るメソジスト教會に智の人が居るから、屢々教會内に騒動が起るのである。他の教會でも同様である。心理學者の主張に依ると宗派合同と云ふ事は、不可能の如く思はるゝが、生命に統一する現代思想からか又心理學上から即ち生命の心理學からは、智情意の三派の何れ

をも一に合同す可き點を見出す事があるかも知れぬ。

第四節 基督者の交際

基督は假令如何なる宗派に屬し、如何なる氣質を有すと雖も、神を信する信仰は同一である。基督の救に與らない者は、一人もない、皆天父の膝下にある兄弟である、互に争ふ可き理由がない。教會歴史を見ると、此の點に於ては、悲しむ可き事があつたに違いないが、近世に於ては、宗派の軋轢は段々其の跡を絶つのである。眞に聖徒の交は、段々厚くなつて來たのである、バプテストの人でも、他の宗派の人に聖晩餐式に列る事を許す様になつて來たのである。又監督教會の講壇にも他の派の人々が立つ様になりつゝあるのである。基督者の交は、即ち聖徒の交である。各宗派の人々は、己の屬する教會の弱點を見て、大いに謙遜しなくてはならぬ。謙遜の徳を養ふに非ざれば、聖徒の交際は出來ない

いのである。

第五十一章 御國の建設

(一) 宗教々育

第一節 教育の機關なき傳道

基督教は、救濟的であるが又教育的である。基督教會は永い間、此の點を等閑に附して居つたのである。傳道さへすれば、神の國は、此の世に建設せらるゝものと思ひ、傳道本位を以て、御國の建設に従事して居たのである。我が國五十年の教會歴史を見る時は、基督の道を聞いた者は、どの位あるか知れぬ、又求道の志を起した者も、どの位あるか知れぬ。道を聞いた者と、求道の志を得た者とを比較すれば、大なる差があるが、バプテストを受けて、教會に籍を置いた者は、中々大したものであ

る。若しバプテスマを受けた者の多分が、其の信仰を維持し活動的であつたなら、今日基督教の勢力は、日本に於ては侮る可からざるものであるに違はない、然るにバプテスマを受けて、教會の門に入る者の内に、素通りをして行く者の多くあるは、基督教會に、教育的機關が缺けて居るからである。此の一點は、如何に辨解するとも、云ひ遁るゝ事の出來ない隠なき事實である。

第二節 方法の誤り

二千年経ても、未だ基督教の勢力が、天下を治むる事の出來ないのは、決して基督教自らが其の勢力になる可き價值がないと云ふ理ではない、基督教は力である、天下を治む可き勢力を有して居るのである。併し其の功を奏する事の出來ないのは、罪は基督教にあらざして、基督教を信ずる其の人にあるのである。基督者が、御國を建設する其の方法

を誤りて居たからである、論より證據、いくら傳道々々と云ふて、幾萬人の人に基督教を聞かしても、聞かしたばかりでは、餘り効果がないのである。勿論信仰は聞くより來るから、聞かさなくてはならぬ事は解りきつた事である。夫れ何千人の聽衆があつたとか、又何千人の求道者があつたとか、大々的に吹聴しても、果となつて信者となり、教會に残る者の鮮きは、自ら傳道に従事した人の告白する處である。

第三節 成長的なる神の國

基督は、神の國は成長するものであると云ふ事を、明白に教訓として遺し給ふたに係はらず、基督者が、成長的、又は生命的に神の國を建設すると云ふ事に、重を置かないのは、實に悲しむ可き事實である。宗教は外より來る者ではない、人の心の内から生ずるのである。百度の説教も若し聽く者の心に其れに對應する本性がなかつたら、其れは恰も空

を打つが如くにして何の手筈がないのである。基督教自らも成長的であり、基督者も成長的であるなれば、御國の建設せらるゝのも又成長的でなくてはならぬ。

種の成長する方法と、御國の建設せらるゝ方法とは同一である。種は一足飛びに大木とはならないのである。種が大木になるには、必ず一定の順序があるのである。神の性質には、變化のある可き理由はないが、其の性質を成長させる人間に顯はし給ふたのは、其の心理の進歩に従つて、己の本質を順序的に顯はし給ふたのである。

五六歳の子供には、地の事の他には、天の事は解らない。換言すれば、自分の目に見るものに非れば、心とか、靈とか、罪とか、救とか云ふ高尙な理が解る可き筈がない。基督教は、教育的であると云ふ時は、宗教は赤坊の時代から、老人に至る迄一歩々々、基督教の眞理の理解を進ませ人

間の進歩發達するに従つて、其の教理を教へなくてはならぬと云ふ事を云ふのである。

第四節 子供は御國の基礎

御國の基礎は、大人に非ずして、子供である。子供に重を置くにあらざれば、何年費すと雖も御國の建設は不可能である。善い種がなければ善い木はない。又は繼續者のない家は、亡ぶる如く繼續者のない教會は、亡ぶるのは當然の事である。一時盛大であつた教會も、衰微するのは、其の教會の繼續者なる子供の宗教々育に重を置かなかつたからである。

大教會にして、子供を教育する機關を設備する事なく、大人にのみ重を置いて子供の墮落するを意ともせないのは、實に愚と云はなくてはならぬ。近世教會に於て、日曜學校事業の勃興して來た理由は、實にこ

れに依るのである。

第五十二章 御國の建設

(二) 宗教々育と傳道との關係

第一節 日曜學校の使命

今日日本に於ける宗教々育の機關は、單に日曜學校のみである。其の日曜學校は猶未だ不完備にして、教育の機關たる使命を果して居らないのである。故に今日の教會には、宗教々育も、學理的に日曜學校にやつて居る處は未だ極く僅かと云ふても過言でないと思ふのである。基督教を單に救濟的であると思ふて居た時代には、説教萬能であつたが、基督教は教育的であると云ふ理想が高調せらるゝ様になつた曉には、説教のみでは教育する事は出來ないのである。

今日の説教には主の日毎に、種々理想の異なる説教をするのであつて、其の説教に思想の順序もない、又聽衆も宗教上の教育に於ては、初歩のものもあれば、又進歩したのものもあるのである。故に説教に依つて教育すると云ふ事は不可能である。飽迄日曜學校を完全なる教育の機關として、宗教々育の大使命を果さなくてはならぬ。

第二節 説教は教育にあらず

露骨に云へば、今日の基督者は、宗教々育と傳道とがよく解つて居らないのである。傳道々と云ふて、講壇の上から説教さへすれば、それでは、信者の修養が出來、それで教會も建設する事が出來ると思ふて居るのである。基督教のいろはも知らないものに、基督の救を説教したからと云ふて解る理由がないのに、無暗に神の名を稱へ、救を叫べば、其れで傳道であると思ふ人が多いのである。前にも述べた如く世が進歩す

ればする程に、今日の所謂傳道説教なるもの、方法を變更しなくてはならぬのである。

今日の説教者の多くは、聴衆に向つて空鐵砲を撃つて居るのである。當らぬは當然の事である。「わからない盡し」の俗歌にも、基督教の説教が解らないと歌はるゝ位であるから、基督教説教の解らないと云ふ事は、定説である様である。解らないのは、基督教の書物が解らないのではなく、話す事が聴く者に解らないのである。其の説教の解らないのは、聴者(殊に日本人)の心理状態を知らない結果である。基督教を解らす様にするには、飽迄も人を見て法を説かなくてはならぬ。(日本人には日本人の年齢により又は日本の比較宗教學的に)

第三節 基督教的改心

ステイブンス博士は「基督者心靈の心理學」と題する書に於て、基督教

國ではない國民即ち基督教の傳播されない國民には、いくら説教を聴かせても、眞正の基督教的改心は出来ないと云ふて居る。己の罪を悟り、悔ひ改めて、基督の救に與るには、子供の時代から、基督の道を、多少に拘はらず聞いて居る者でなくては、如何に説教を聞いても注意を促さるゝ事は出来ない。従つて其潜在意識に基督教に關する智識が皆無であるから、改心する事は出来ないのは當然の事である。

著者が或る片田舎で、親心と云ふ題で説教をした事があつたが、聴衆に佛教信者のお婆さんが居たが、頼りに私の説教を聞いて、南無阿彌陀佛と口に稱へて居つた、いくら神の愛と云ふても、此のお婆さんには、潜在意識に訴へて、改心させる事は不可能である。故に今日、傳道々々と盛んに進撃的にやるには、第一、日本國民否日本の兒童全體に對して、多少に拘はらず、基督教を聞かさなくてはならぬ。日本の子供と西洋の

子供との相違は、一は佛教的であり、他は基督教的である事である。西洋人が佛教を聞いても、佛教的に改心する事の出来ない様に、日本人は基督教を聞いても基督教的に改心することは出来ないものである。改心の心理の基礎は、潜在意識にあるのである故に、傳道を盛大にして、一呑に信者を得んと欲せば、子供の基督教々育に熱中せなくてはならぬ。

基督教倫理 終

不許複製

大正四年三月二十日印刷
大正四年三月廿五日發行
【定價十五錢】

東京府北豐島郡巢鴨町一六二三
著者兼發行者 田村直臣

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷者 島連太郎

東京市麹町區有樂町二丁目三番地
發行所 木一ム社
振替東京二五二二〇番

終